

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：23302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K17544

研究課題名(和文) ASD患者の語りから検討する看護師のケアに関する研究

研究課題名(英文) Investigation on care by nurses based on narratives of ASD patients

研究代表者

大江 真吾 (oe, shingo)

石川県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：50611266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：ASD患者が看護師とかわった場面として、ASD特性に焦点を当てた場面だけでなく、日常生活場面が挙げられ、ASD患者の日常生活全般に対する看護ケアの知見を積み重ねていくことの必要性が考えられた。また、ASD患者がもつ字義的にとらえやすいという面や他者に共感しにくいという特徴によってASD患者の認識と看護師の意図の間にはズレが生じていた。このズレが生じる状況の中で、看護師は良いタイミングで自己肯定感に働きかけるかわりの必要性や、ASD患者の共感性を養える看護ケアの可能性が示唆された。認知と意図が一致したケースについては、そのかわりの継続的な実践が必要であると看護師は考えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの研究では、ASD患者の特性を要因とする他者とのコミュニケーション課題や問題行動に対する看護ケアが検討されてきたが、本研究の結果より看護師はASD患者の日常生活全般にかかわっており、この点について知見を重ねていく必要性が明らかになったことは、効果的な看護ケアにつながる可能性がある。また、ASD患者のもつ字義的にとらえる傾向や他者との共感をもちにくい特徴に配慮した看護ケア必要であることが明らかになったこと、自己肯定感を養う看護ケアの可能性が示唆されたことは意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)：Scenes in which autistic spectrum disorder (ASD) patients interact with nurses include scenes in daily life in addition to scenes with a focus on ASD characteristics, and it was considered necessary to accumulate knowledge about nursing care for all aspects of daily life of ASD patients. Moreover, ASD patients' characteristics of being prone to literal interpretation and having difficulty in empathizing with others appeared to have an impact on gaps between perceptions of ASD patients and intentions of nurses. In settings where such gaps emerge, it was suggested that nurses need to have interactions acting on patients' self-affirmation in a timely manner and may be able to provide ASD patients with nursing care facilitating the development of empathy. In cases where there are no gaps between perceptions and intentions, nurses thought that the interactions need to remain that way.

研究分野：精神看護学

キーワード：自閉スペクトラム症 看護ケア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2005 年から発達障害者支援法が施行され、これまでの障害者福祉制度の谷間におかれた発達障害児(者)に対する障害特性やライフステージに応じた支援を国や自治体が行うよう制定された。これまでの先行研究<sup>1)-4)</sup>から自閉スペクトラム症(以下,ASD)は決して稀な疾患ではなく、今後も社会全体で支援していくことが必要であることは明らかである。

現在の ASD 患者へのかかわりは、地域社会で福祉サービスを受けながら学校や会社、家族による療育を受け、様々な経験を通して他者の理解や社会規範などを学んでいくことが主である。精神科病院への入院適応となるのは、ASD 患者を支援する周囲の人々が受け入れられないような衝動行為や、ASD 患者を取り巻く環境などを原因とした二次障害の一つである精神病様症状を呈した場合である。入院となった ASD 患者は、衝動性や精神病様症状への対応として投薬治療が行われ、二次障害の起因となった環境への適応を図った上で退院となる。このように ASD 患者の短期間の入院期間の中で、看護師は日常生活の援助、物事との捉え方や周囲への認知のゆがみを修正するなどの治療的なかかわりを行っている。看護師の治療的なかかわりについての先行研究では、患者の独特の考え方や行動様式など発達障害の特徴である個別性を重視しなければいけない事例が多く、障害の性質をふまえたアプローチが重要であるとする研究(上永,2005)や、個別的な場面での行動変化から社会性の成長へと促していく点が大切(内田,2006)などがある。しかし、ASD 患者との関係性の構築に 1 年 5 カ月を要したという報告(玉木ら,2014)や、適切ななかかわりが行えなかったという報告(志茂ら,2015)もある。また、ASD 患者が看護師を希薄な存在で理解してくれない存在であると認識している一方で、安堵感を抱け、支援してくれる存在として認識しているという両価的な存在として看護師を認識した上で、看護師に対して理解してほしいという期待を抱いている(大江ら,2015)報告もある。このように、ASD 患者と看護師の間には看護ケアを通してかかわりが存在しながらも、その両方が適切なケアを受けていない、提供できていないという思いを抱いている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、看護師の行う実際のケアと ASD 患者の求めるケアとの違いを明らかにし、ASD 患者の入院看護への示唆を得ることである。

### 3. 研究の方法

研究参加者は、精神科病院に入院し、研究の趣旨に同意の得られた ASD 患者と看護師とした。ASD 患者の選定に当たっては、看護師とのかかわりをふり返って語りることができること、精神状態が安定しており面接の実施について主治医の許可が得られたことの 2 点を条件として病棟部長から推薦してもらい、研究代表者から研究協力の依頼を行った。研究参加の承諾を得た ASD 患者と面接を行った。ASD 患者はその障害の特性から、関係性が築けていない人間がいることで精神状態が不安定になることや、通常の行動をとることができない可能性が高い。そのため、研究参加候補者の理解と関係性の構築のため頻回に対象施設を訪れ、研究参加候補者と対話を持つ期間を設けた。研究参加者(ASD 患者)との面接は 15 分程度とし、入院病棟内で研究参加者(ASD 患者)が希望する場所で行った。面接内容は、この数日間で看護師からどのようなかかわりがあったか、そのかかわりをふり返って看護師の意図はどんなことであったと考えられるか、その時に看護師からどのようなかかわりが欲しかったか、について尋ねた。その後、研究参加者(ASD 患者)からかかわりを語られた看護師に対して面接を行った。面接は 10 分程度とし、勤務病棟内で研究参加者(看護師)が希望する場所で行った。面接内容は、研究参加者(ASD 患者)から語られた場面についてどのような場面であったか、行ったかかわりの意図はどんなことであったか、ASD 患者のニーズをふまえた上でどのようなかかわりを行うか、について尋ねた。ASD 患者、看護師の両者への面接内容の記録は、研究参加者に記録の承諾を得たうえで、IC レコーダーで録音し、得られたデータは速やかに逐語録に整理した。

面接で得たデータの全てを精読し、ASD 患者と看護師のかかわりがあった場面について整理した。ASD 患者が受け取った意図とかかわった看護師の意図については、両者のズレについて整理し、コード化した。さらにコードの類似性と差異性を比較検討し、共通する意味をもつものを同土をサブカテゴリー、カテゴリーに分類した。分析内容は随時、研究参加者となった ASD 患者や看護師に確認した。また、データ分析過程においては、精神看護の研究と教育、質的研究を行う研究者からスーパーバイズを受け、信頼性、妥当性を確保するように努めた。

#### 倫理的配慮

本研究の実施に当たり、対象施設の看護部長および看護師長、研究参加者となる可能性のある看護師、研究参加者である ASD 患者とその主治医に対して、研究の趣旨、参加の自由、不参加による不利益が生じないこと、匿名性の保証について文章と口頭で説明し、書面にて同意を得た。面接は研究参加者が希望する場所で行い、プライバシーの保護に配慮した。結果の記述においては、個人が特定されないように留意して表記すること、研究の公表についても承諾を得た。また、

面接中の ASD 患者の状態の変化に留意し、医療スタッフと常に連携し、必要に応じて情報交換を行った。なお、本研究は所属大学の倫理審査委員会の承認（承認番号 271）を受け、実施した。

#### 4. 研究成果

##### 1. 研究参加者の概要

本研究の参加者は、ASD 患者 4 名（男性 3 名、女性 1 名）、看護師 8 名（男性 5 名、女性 3 名）であった。

##### 2. 分析結果

）ASD 患者から語られた看護師とかかわった場面

ASD 患者が看護師とかかわったエピソードとして語った内容を整理した結果、「対人関係場面」、「日常生活場面」、「セルフケア能力に関する場面」、「退院支援に関する場面」、「精神的不調の場面」の 5 つに整理された。

）ASD 患者と看護師との間に生じた意図のズレ

ASD 患者と看護師との間に生じたかかわりの意図のズレを検討した結果、38 のコードを抽出し、それらを 7 のサブカテゴリー、5 のカテゴリーに整理した。

カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》とし、説明する。

ASD 患者は看護師とかかわる場面において、看護師からの言葉かけに対して《看護師からの言葉は理解できるが、そこに含まれる意図を考えない》ことで目の前にいる看護師の意図を理解することができていなかった。また、《看護師からの明確な言葉がないことによって、その奥にある意図が分からない》ことで看護師の意図が伝わっていなかった。これらは ASD 患者と看護師の間で起こる【具体的な言葉を使わないことで生じるズレ】であった。

ASD 患者へ看護師の意図が伝わっている場面においても《複数の意図のうち、一つは認識できる》ことで【複数の意図が含まれることで生じるズレ】が起こっていた。また、ASD 患者が看護師からの言葉かけを受けて《先を見据えることによって、現状への視点が薄れている》ということや《前向きなとらえによって具体性が失われる》ことによって、一見して看護師の意図を理解しているように見える中で【前向きなとらえによって生じるズレ】が生じていた。加えて、ASD 患者が看護師の言葉かけに対して《誤った言葉の意味の推測によって、異なる意図が作られる》ことで【誤った推測によって生じるズレ】が生じていた。

一方、ASD 患者と看護師のかかわりの場面において、《患者の認識と看護師の意図が一致している》こともあり、【認識と意図の一致】があった。

）ASD 患者のニーズをふまえた看護師のかかわり

ASD 患者のニーズをふまえた看護師のかかわりについて検討した結果、31 のコードを抽出し、それらを 7 のサブカテゴリー、3 のカテゴリーに整理した。

カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》とし、説明する。

看護師は ASD 患者へ意図を適切に伝えるため《タイミングの良い具体的な言葉かけ》が必要であるとと考えていた。またその言葉かけは《患者の頑張りへの支持と今後への助言》であったり、《モチベーションをもてる言葉かけと行動振り返りの促し》であることが求められていると考え、【タイミングを見計らった上での自己肯定感に働きかける具体的な言葉かけ】をかかわりとして挙げていた。

また、一方的に看護師の意図の理解を求めるのではなく、《希望を受け入れてほしいという患者の思いをふまえた、看護師の意図の理解を促す言葉かけ》や ASD 患者に看護師の意図が全く伝わっていないことから ASD 患者のニーズが表出されていない場合には《看護師の意図が理解できていないことに起因するニーズ不足に対して、具体的で継続的にかかわる》ことで ASD 患者のニーズを引き出す必要性を感じていた。さらに、看護師がかかわりに含ませていた複数の意図が伝わっていない状況では《看護師の意図を十分に理解できていないことに起因するニーズ不足に対して、一定の理解が得られていることをふまえた継続的なかかわり》によって ASD 患者にニーズを引き出す必要性を感じていた。これらは一度のかかわりで達成されるものではなく、【看護師の意図を伝える継続的なかかわり】によって達成されると看護師は考えていた。

ASD 患者のニーズが表出されない場合には、看護師の意図を適切に理解しているからという場合もあり、《看護師の意図を理解しているため、かかわりの修正は必要がない》と看護師はとらえ、現在のかかわりを継続していく【効果的なかかわりの実践】が必要であるとと考えていた。

#### < 引用文献 >

##### 引用文献

文部科学省（2012）. 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について。

神尾陽子（2013）. 就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の变化：地域ベースの横断的および縦断的研究。厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 平成 23 年度

～25年度 総合研究報告書。

小林達也(2006). 軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業 平成16年度～18年度 総合研究報告書.

Kim YS, Leventhal BL, Koh YJ, et al (2011). Prevalence of autism spectrum disorders in a total population sample. *The American journal of psychiatry*, 168(9), 904-912.

上永浩一(2005). 問題行動を繰り返すアスペルガー障害患者との関わり チェックリストを用いたアプローチを試みて. *日本精神科看護学会誌*, 48(1), 242-243.

内田正樹(2006). アスペルガー症候群をもつ思春期事例の入院看護. *日本精神科看護学会誌*, 49(2), 21-25.

玉木敦子, 松岡純子(2014). 学齢期にある広汎性発達障害児と看護師との関係構築 家庭訪問を1年5ヵ月継続した時点での事例研究. *甲南女子大学研究紀要*, 8, 33-41

志茂京美, 西平雄二, 新城夏紀, 他(2015). 思春期発達障害の行動療法プログラムの実際 1 事例に介入した行動療法の振り返りからの成果と課題. *沖縄県看護研究学会集録*, 73-76.

Shingo Oe, Kazuyo Kitaoka, Kyoko Nagata(2015). What patients with pervasive developmental disorders think of and expect from nurses. *Journal of the Tsuruma Health Science Society, Kanazawa University*, 39(1), 1-10.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----